

〔日本書紀十二〕八十七年○仁爰仲皇子畏有事、將殺太子○中略、中、爰瑞齒別皇子正○反歎之曰、今太子與仲皇子並兄也、誰從矣、誰乖矣、然亡○中略、中、恐去無道就有道、其誰疑我、則詣于難波、伺仲皇子之消息○下略、下是天皇則遣使以令殺武內宿禰時、武內宿禰於筑紫、以監察百姓、時武內宿禰弟甘美、內宿禰廢兄即讒言于天皇、武內宿禰常有^望天下之情、今聞在筑紫而密謀之曰、獨裂筑紫、招三韓、令朝於己、遂將有天下、於是壹伎直真根子者、其爲人能似武內宿禰之形、獨惜武內宿禰無罪而空死、便語武內宿禰曰、今大臣以忠事君、既無黑心、天下共知、願密避之、參赴于朝、親辨無罪、而後死不晚也、且時人每云、僕形似大臣、故今我代大臣而死之、以明大臣之丹心、則伏劔自死焉、時武內宿禰獨大悲之、竊避筑紫、浮海以從南海廻之泊於紀水門、僅得逮朝、乃辨無罪。

〔長門本平家物語十四〕根井小矢太は伊東九郎○清祐に組んで、どうと落つ、伊東九郎をとて押へて首をかみ、この伊東九郎は源氏に付くべからざるが、平家へ参る事は、父伊東入道○親祐、兵衛佐○源賴を討たんと内々議しけるを、ひそかに佐殿に告げ奉りて、伊豆の御山へ逃したりじによて、奉公に兵衛佐殿坂東を討取て、鎌倉に居住の初いどう入道日頃のあだのがれ難さに、自害しでうせし時、九郎を召出して、汝は奉公の者なむとて、御恩あるべきよし仰せられければ、九郎申けるは、誠に御志畏りて存候へども、父の入道御かたきとなりてうせ候又その子として世に候はんこそ面目なくおぼえ候昔父の入道君をい參らせんとし候し時、潛に告げ申て候じ事は、一切未に御恩を蒙らんと思ひよらず候きはやく首を召さるべく候然らずばいとまを給て、京へまかりのぼり候て、平家に付き奉て、君を射奉るべしと申ければ、兵衛佐殿打ちうなづきて、奉公の者なれば、いかでが切べき汝一人ありともそれによるまじ申所返々神妙也、早く平家につけとていとまをえさせつ、よて九郎平家に付き奉りて北陸道に下りて、つるにけふ討れぬることあ